

長野県立歴史館たより

2018 年 冬 号 vol.97

特集——平成30年度 冬季展

自然を見つめた
田淵行男展



平成30年度
冬季展

自然を見つめた田淵行男

会期：平成30年12月15日(土)～平成31年2月17日(日)



田淵行男記念館

田淵行男という
写真家をご存じで
すか。

安曇野市には田
淵行男記念館があ
り、約8万点にの
ぼる資料を保存し、
展示しています。
この記念館は旧豊
科町と全国の篤志
家の支援によって
1990(平成2)年
設立されました。

田淵は山岳写真
の重鎮であるとい

もに高山蝶やアシナガバチの研究者でもありまし
た。2019(平成31)年は、田淵行男が亡くなって
30年という節目の年です。今回の展示は田淵の
目を通して安曇野の景観がどのように変わったの
か、民俗学者向山雅重らとの雪形研究の交流など
を軸に、田淵の自然を観察する力を、写真や「写
蝶」(水彩画)から見たいと思います。

I ナチュラリスト田淵行男の誕生

田淵は1905(明治38)年鳥取県で生まれました。
両親が亡くなった後、叔母に預けられ、台湾、東
京と居を移します。大学卒業後、中学校や高等女
学校の博物学教師となります。

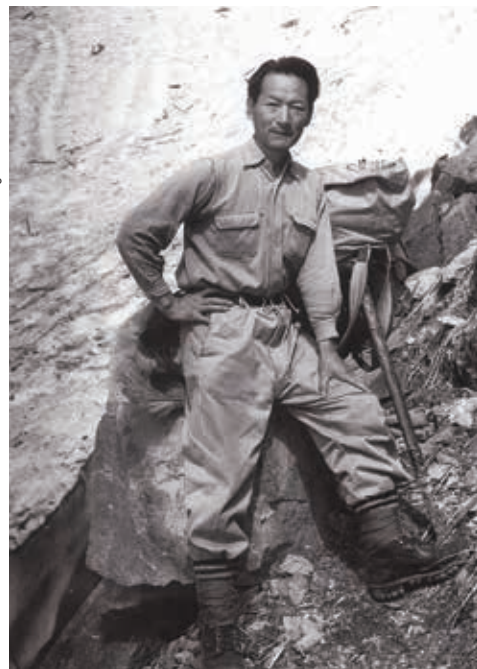
記念館には1932(昭和7)年から1943(昭和
18)年にかけて田淵が作った手製の山行アルバム
が残されています。写真をちりばめ、解説を加え
たアルバムは、後年田淵が制作する写真アルバム
づくりの原点に位置づけられます。

1945(昭和20)年、大空襲に備え田淵が家族と

住んだ東京の家
は建物疎開の指
令を受け、壊さ
れてしまいます。
山仲間の紹介で
南安曇郡西穂高
村牧(安曇野市)
へ疎開します。

「Our life in
Maki」という
アルバムは田淵
が作った家族の
アルバムです。

戦後の安曇野で
穏やかに家族と
暮らす田淵を見るができます。



田淵行男 常念一ノ沢にて 1955年
(田淵行男記念館蔵)

II 安曇野へ

「高山蝶の研究」、「アシナガバチ」、「安曇野の
変貌」の3つの小テーマを設けました。

牧へ疎開した田淵は、何度か常念岳に登る中で
高山蝶に魅了されていきます。タカネヒカゲの生



初夏の上高地 ミヤマシロチョウ 1954年6月
田淵行男撮影(田淵行男記念館蔵)

態を研究し、2度の冬を乗り越えて成虫になることを発見しました。

1960(昭和35)年、ヘリコプターによる農薬の空中散布でアシナガバチの観察地が壊滅したため、撮影地を東京の多摩地区に一時移しました。

1960～70年にかけて田淵は、精力的に安曇野の撮影に取り組みました。高度成長によって変わりつつあった安曇野の原風景を必死で撮り続け、写真集の中で自然保護、環境保全の大切さを訴え続けていきます。



安曇野に多い石仏や碑 1970年
田淵行男撮影(田淵行男記念館蔵)

Ⅲ 雪形をめぐる～向山雅重らとの交流～

日本画家の加藤^{とうりよう}洵綾は1962(昭和37)年北穂高の山小屋で田淵に出会いました。意気投合した加藤は友人であった民俗学者向山雅重を田淵に引き合わせます。

雪形を通じて三人の親友としての交流が始まりました。上伊那郡宮田村の向山は中央アルプスの雪形の情報を田淵に送りました。

Ⅳ 「写 蝶」～チョウを描く～

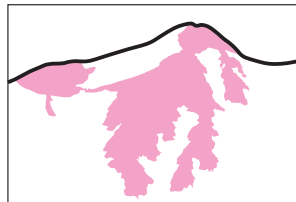
田淵は写真を撮る以前から、蝶を入念に観察し細密に描きました。成虫や蛹をおおむね20倍前後に拡大して水彩で描いたのです。1921(大正10)年から1955(昭和30)年頃まで、中断期をほとんど足かけ35年間、蝶を描き続けました。

V 写真集の制作～田淵行男芸術の到達点～

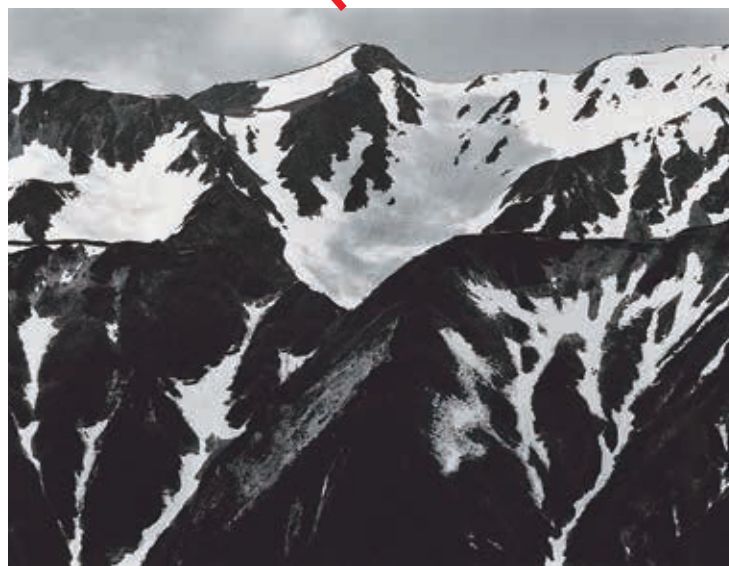
田淵は30を越える写真集や著書を世に出しています。その多くが50歳代から晩年にかけて発行されました。写真集を作る際、田淵は詳細なレイアウトを描き、割り付けの指示までおこなっています。本づくりに妥協を許さない田淵の姿勢を見ることができます。

Ⅵ 田淵行男にとっての自然保護思想

田淵は虫の観察や登山の撮影を通じて感じた自然に対する思いを書籍を通じて訴えてきました。これにより、1976(昭和51)年環境庁長官から自然保護思想普及功労賞を贈られました。田淵が伝えたかった自然保護の思いは、田淵行男記念館による子ども達の自然観察会「むしの会」などに引き継がれ、開館10周年を記念して創設された田淵行男賞が自然保護写真家などに贈られています。



「舞姫」の雪形



中岳の「舞姫」(常念乗越より) 撮影年不詳
田淵行男撮影(田淵行男記念館蔵)

考古資料を
読む

信州の特色ある縄文土器

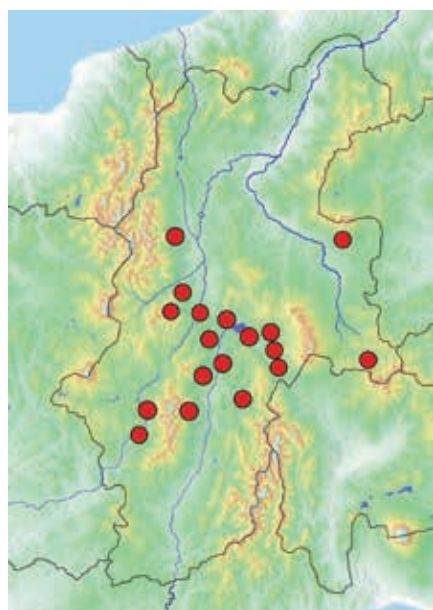
＝新指定長野県宝 縄文時代中期の土器158点＝

1 新指定長野県宝 縄文中期土器158点

平成30年8月29日の第1回長野県文化財保護審議会において、「信州の特色ある縄文土器」として、18市町村出土の縄文土器158点を、長野県宝（有形文化財 県宝〔考古資料〕）に指定するとの答申がありました。

この答申を受けて、平成30年9月27日に、長野県宝に指定されました。

2 信州の特色ある縄文土器



新県宝指定縄文土器所蔵市町村

岡谷市・諏訪市・茅野市・原村・富士見町・箕輪町・南箕輪村・宮田村・辰野町・伊那市・山形村・朝日村・安曇野市・塩尻市・大桑村・上松町・川上村・御代田町

今回の県宝指定となった、縄文土器の時期は、すべて縄文時代中期の土器です。

縄文時代は、一万数千年と長く続きました。使われていた縄文土器は、形や文様の変化から草創期、

早期、前期、中期、後期、晩期の6期に分類され、それぞれに特徴があります。

また、縄文時代中期の土器は、縄文造形美と謳^{うた}われています。土器には、創造的・躍動的・呪術的で装飾性豊かな文様を緻密に計算して、卓越した技術で文様を作り出しています。

「長野県宝候補物件調査票」によると、指定理



尖石遺跡 蛇体把手付深鉢形土器（茅野市）
（写真提供 茅野市尖石縄文考古館）



穴場遺跡 動物装飾付香炉形土器（諏訪市）
（写真提供 諏訪市教育委員会）



居沢尾根遺跡 大形把手付深鉢土器（原村）
（写真提供 原村教育委員会）

由について、「長野県の縄文中期土器は、華美なしかし意味のある独特な文様、特異な造形を特色として、信州で繁栄した縄文文化の徴表であり、極めて特色ある遺産である。また、高度経済成長期以後、県内各地で実施された開発に伴う発掘調査によって大量に出土した縄文土器は、一定の基準のもとに包括的に指定し、文化財遺産群として後世に伝え、遺していく必要がある(略)」と示されています。

今回、新たに長野県宝に指定された土器は、選定基準の内「学術的価値がある。報告書・学術書等への記載があり、時期や土器型式が明確であること。」と土器全体または、主たる文様の残存率が高いもの、という、2項目について158点全ての土器が満たしています。残りの4項目については、文様等に係わる基準であり、いずれか、または複数に該当しています。

長野県の縄文時代中期の土器は、全国的にも類を見ないほどの質・量を誇ります。縄文土器に施された呪術的な文様は、縄文時代の社会の在り方や精神構造の現れであるとも考えられています。

今回、各市町村で、大切に保管・展示されていた縄文土器が県宝に新指定されることで、全国的にも類を見ない質・量を誇る縄文土器を貴重な文化遺産として再評価することを通して、郷土の歴史への理解を深め、資源の保護・活用や緻密なものづくりのあり方が浮き彫りとなることでしょう。

このような特色がある信州の縄文時代中期の土器への理解や活用を通して、学校教育・生涯学習や広く観光資源としてのさまざまな活用方法が期待されます。

3 おわりに

新指定長野県宝縄文時代中期の土器は、2019年の「巡回展 長野県の考古学」のテーマ展示のひとつとして、一部展示公開を計画中です。

この機会に是非、縄文造形美を生み出した“^{たくみ}匠”が手がけた土器に接し、知恵や苦勞を感じながらその技と美しさを体感していただきたいと思います。
(近藤尚義)



剣ノ宮遺跡 装飾絵画文深鉢形土器(塩尻市)
(写真提供 塩尻市教育委員会)



島崎遺跡 唐草文深鉢形土器(伊那市)
(写真提供 伊那市教育委員会)



宮平遺跡 顔面装飾付釣手土器(御代田町)
(写真提供 浅間縄文ミュージアム 撮影 小川忠博)

ミニ展示から

ミニ展示「信州の野球史 夏」

第100回全国高等学校野球選手権記念大会に関連して、当館の平成25年度夏季企画展「信州の野球史」で展示した当館収蔵パネルを中心に、若干の資料を展示しました。

戦前までの信州の野球熱は、当時の子どもが、満州へ移民したら野球が出来ないと記した思いや、小・中学校の試合写真を通し現在を圧倒する熱狂ぶりであったことが窺えます。1930（昭和5）年までの夏・春の全国中等学校野球大会での長野県の決勝進出回数5回は全国4位で、東日本では突出した実力を誇っていました。今回の展示では、この5回の活躍ぶりをパネルと新聞記事で紹介しました。

第100回記念大会の決勝戦では、秋田県代表の金足農業高校が農業高校として初の決勝進出で優勝を飾るかと話題になりました。

実は戦前の1931（昭和6）年の全国中学校優勝野球大会で、台湾代表の嘉義農林学校が決勝戦に進出し愛知県代表の中京商業学校に敗れています。この嘉義農林の活躍ぶりは、映画「KANO～1931海の向こうの甲子園～」として2015（平成27）年に放映され話題となりました。当時の日本の植民地支配や満州帝国建設により、戦前の夏・春の大会には台湾、朝鮮、満州からの代表も参加していました。嘉義農林野球部は台湾先住民、台湾漢人、日本人による混成チームで話題を呼びました。

この嘉義農林は、諏訪蚕糸学校（現岡谷工業高校）が昭和4年暮れから5年の正月にかけて台湾遠征した折りに試合を行っています。今回、遠征時の貴重な8mm映像（岡谷市所蔵）と遠征時に着用した生糸製ユニフォームの複製（当館蔵）を展示しました。

このほか諏訪蚕糸が残した1917年：対諏訪中学（写真）、1919年：対松本商業、大正12年：



岡谷工業高校
同窓会蔵

対上田中学と記録されたボールを岡谷工業高校同窓会から借用し展示しました。大正期のボールの縫い目は、現在のボールよりも細かい縫い目に見えます。その縫い目はいくつなのか。現在の硬式ボールの縫い目は、人々の煩惱を数えた除夜の鐘と同じ108つとされています。スポ根漫画「巨人の星」の中では、「すべての苦しみ、悩み、迷い、その涙をこの白球だけに込めて乗り越えてくれ」と父星一徹が息子飛雄馬に語るシーンが描かれています。

最後に野球から何を学ぶか。この思いを展示しました。ベースボールやプロ野球に無いもの、それは試合前と後の挨拶です。これは1911（明治44）年秋に、第二高等学校主催の奥羽6県中等学校野球大会で初めて行われ、1915（大正4）年からの全国中等学校優勝野球大会に採用され、現在に至っています。勝者も敗者も互いの健闘を讃え合い尊重しあう姿勢がここにあります。

また、高校球児へのメッセージとして、長野県師範学校野球部出身の小池萬吉氏や、明治大学野球部出身の宮坂真一氏の思いを文字パネルとして展示しました。

今回の展示の総括として小池氏や宮坂氏が文面に記された、厳しい練習や試合を通して、学業と運動を両立し、人や社会に尽くす野球人となってもらいたいという思いが、野球を愛する人たちに伝わっていれば幸いです。（西山克己）

五榜の掲示

当館では、近代資料として「五榜の掲示」を展示しています。五榜の掲示は、1868（慶応4）年3月15日に、太政官（明治新政府）が旧幕府の高札を撤去し、その代わりに民衆に対して出した五つの高札です。

高札はよく時代劇にも登場しますが、制札ともいい、法令や禁令を板の札に墨書し、町や村の人目につきやすい場所に掲示されたものです。

高札を掲示するために、屋根付きの立派な高札場がおかれることが一般的でした。高札場は、幕府や藩の通達を知らせる場所でしたが、明治政府はその場所をそのまま使って最初の通達を出したのです。

高札として出された五榜の掲示の実物の中には、その役割を終えたのち、廃棄されずに、町や村の物置のようなところや、地域住民の方の自宅の蔵などに収められて長く保存されたものがあります。

そのようなものが、最近になって、お持ちになっていたお宅からご寄贈いただいたり、古書店等で売りに出されたものを入手したりすることで、当館の所蔵品として加わりました。

五榜の掲示はその名のとおり、五つの高札からなります。この度、当館で展示しているのは、第一札と、第三札です。

第一札は人として「五倫の道（儒教における五つの基本的な人間関係）」を正しくすることや殺人・放火・盗みなどの禁止、第三札はキリスト教や邪宗門の禁止を命じています。

それぞれ実物資料を見てみましょう。

まずは第一札です。

慶応4年の太政官からの公布の後に、1871（明治4）年ごろになって長野県庁から改めて出されたものです。慶応4年にはまだ長野県は存在していませんから、この高札は長野県が成立した

明治4年以降に作成され、高札場に掲示し直されたものだと考えられます。

この資料の面白いのは、記されている年月です。五榜の掲示が出されたのが慶応4年の3月なのに、2月と書かれています。おそらく書いた人による単純な写し間違いだと思われます。

もう一つの第三札を見てみましょう。

実は、第三札は公布された後、一度改定されています。展示の資料は、改定後のものです。

当初は「切支丹^{きりしたん}邪宗門」とひとくくりで表現されていた文言を「切支丹宗門」と「邪宗門」とに分け、別の条文にしました。邪宗門というのは、「邪悪な宗教」という意味で、為政者に従わないなど権力側にとって面倒な宗教団体等を示します。当初の第三札の文言を知った欧米諸国は明治政府に猛抗議をおこなったため、慌てた明治政府はただちに「切支丹」と「邪宗門」を分けてそれぞれを禁止すると訂正しました。

この第三札の実物資料は、明治4年に当時の筑摩県により作成された高札です。裏面の中央には「葛島^{かつらしま}」という記載があります。「葛島村」（現上伊那郡中川村葛島）の高札場に掲げられたものであることがわかります。

江戸時代以前から広く庶民に法令を伝達してきた高札も、伝達手段の整備や印刷技術の向上などにより存在意義が薄れたため、この「五榜の掲示」を最後に1873（明治6）年2月24日をもって撤廃されました。

近世と近代の境目に出され、近世の雰囲気の色濃く残している五榜の掲示は、明治初期の政府や県からの地域への情報伝達の様子的一端を伺い知ることができる資料だといえるでしょう。

（山田直志）



第一札



第三札

INFORMATION

インフォメーション

■2018(平成30)年度 12月～3月の行事予定

12月

休館日
3・10
17・25
28～31

冬季展

自然を見つめた 田淵行男

12/15(土)～2/17(日)

■対 談

1/19(土) 13:30～

「田淵行男と人づくり

—安曇野の環境保全—」

場 所 穂高交流学習センター

「みらい」

参加者 那須野雅好氏
(安曇野市教育委員会)

江田 慧子氏
(帝京科学大学)

巻 山 圭一氏
(飯田高校)

笹 本 正 治
(当館館長)

林 誠
(当館学芸員)

■ギャラリートーク

12/23(日・祝)・1/26(土)

2/16(土) 13:30～

場 所 当館企画展示室



安曇野田園風景 レンゲ田 1960年代
田淵行男撮影 田淵行男記念館蔵

講座・イベント

近世史セミナー

テーマ 「近世地方都市の生活」

12月9日(日) 13:00～

講 演

「幕末維新期における
松本地方の医療環境」

講 師

塩原佳典氏(畿央大学)
他、研究報告を予定しています。

県立歴史館の信州学講座

第5回 12/1(土) 13:30～

「信州の風景とイギリス風景画」
(櫻井綾乃氏 長野県教育委員会)

第6回 12/22(土) 13:30～

「近世後期の武士家臣団
—松代藩を例として—」
(宮澤崇士氏 飯山市教育委員会)

第7回 1/12(土) 13:30～

「縄文時代の食料事情」
(寺内隆夫)

第8回 2/9(土) 13:30～

「雪国のくらし」
(畔上不二男)

信州学出前講座in諏訪 (諏訪市博物館)

2/23(土) 13:30～

「諏訪信仰と室町幕府」
(村石正行)

信州学出前講座in松本 (松本市立博物館)

3/2(土) 13:30～

「河童が登場するまで
—人と水の関係史—」
(寺内隆夫)
「日本人の心に生きる『河童』」
(溝口俊一)

第9回 3/9(土) 13:30～

「旧石器時代の信州」
(大竹憲昭)

信州学出前講座in飯田 (飯田市美術博物館)

3/10(日) 13:30～

「田中芳男—博物館の父は
飯田から羽ばたいた—」
(青木隆幸氏 飯田OIDE長姫高等学校)

「県立歴史館の信州学講座」は先着90名、
当館第1研修室で行います。事前申込み
(申込書、FAX、はがき、インターネット)
が必要です。

1月

休館日
1～3
7・15
21・28

2月

休館日
4・12
18・25

3月

休館日
4・11
18・22
25

巡回展

長野県の考古学

3/16(土)～6/23(日)

表紙の写真の解説



安曇野に多い石仏や碑 1970年 田淵行男撮影 田淵行男記念館蔵
JR大糸線 白馬森上駅から西へ向かった地域で撮影
したもの。写真に写る石仏は「馬頭観音」です。

行事アルバム

** 巡回展イベントin塩尻 **



考古資料課では、巡回展に関わる【地域展】イベ
ントを塩尻市で開催しました。塩尻市・松本市・安曇野
市の遺跡を題材に、各教育委員会の職員をまじえたパ
ネルディスカッション「松本平の弥生文化を考える」
に会場は満席となりました。

** 信州学出前講座in上田 **



館職員が各地の博物館に出かけて話をする「信州学
出前講座」が始まりました。上田市信濃国分寺資料館
の講座では「身近な地域の古墳や新しい発見について
知ることができた。」などの感想をいただきました。
今後、箕輪、諏訪、松本、飯田で順次開催します。

** 考古学講座 遺跡探訪会 **



10月6日(土)、「最古の信州ブランド黒曜石原産地を訪
ねる」と題して、長和町星葉峠黒曜石原産地遺跡、下
諏訪町埋蔵文化財センター、尖石縄文考古館を訪ねま
した。長和町では縄文人が実際に黒曜石を採掘した場
所を見学しました。目の当たりにする遺跡の迫力に、
思わず息をのんでしまいました。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.97

2018(平成30)年11月15日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail : rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ : <http://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社